



田中河内介父子の墓参をする顕彰会一行

香住・生野紀行 ①

田中河内介父子の墓参

田中河内介顕彰会では本年五月二十七日、宮崎県日向市細島の維新前夜の勤王の三志士の墓参した。これ

に続いて十一月七日午前七時五十分福田港発で「田中河内介生誕地」を十九人が訪ねた。

内海町木下英幸、黒島光雄、谷岡稔、佃豊年、松本富雄、濱弘、大森喜代治、三好伸、永井勝也、清水好美、壺井久子、鍛冶桂子、浜元美智子、池田町片山鹿之助、土庄町上田行雄、上枝文敬、岡桂、藤井豊、豊岡・白瀧邦子

貸切バスで豊岡市香住の田中河内介生誕地に正午ごろ

到着。

澤田幹雄香住地区会長らの出迎えをうけ、香住公民館で本年一月二十八日、藤井、片山、浜、三理事の訪問再会を喜びあった。田井和男氏が故人になられたのは残念だった。一行は昭和十二年建立した「鬼神泣壯烈」大久保利武書、豊田小四郎撰文碑前で記念撮影して、同公民館より西約二百mの丘陵の墓地で「田中河内介父子の墓」と小森家の墓、田井和男氏の墓参をして但馬路を北へ城崎へと向った。

青年時代

田中河内介の生家、小森

家は阿波国小松島の出で、安永七年（一七七八）但馬国に移住して代々医業を開いていた。

文化十二年（一八一五）

に生れ、幼名を賢次郎といひ、長じて緩猷（やすみち）、字士徳、号恭堂、臥竜といつた。賢次郎の兄は五男、二女で一男二女は早逝。長男信右（三世正造）は医業を継ぎ門前市をなすほどの評判の高い良医であった。賢次郎は医者より儒者を望み、二里（約八キロ）離れて出石の学者井上静軒、桜井東亭に学び、後、頼春水、若槻幾斎について修学した。頼山陽、摩島松南とも学友で仙石藩から重要視されていた。

天保六年（一八三五）二十歳のとき京都に出て山本亡羊に学ぶ、亡羊の推薦で中山大納言忠能（ただやす）へ仕えた。このとき田中諸

太夫（しよたいぶ）＝公卿（くぎよう）に次ぐ家柄で朝廷から親王、摂関、大臣家の家司に補せられ、四位・五位の官人、武家では五位の侍、（広辞苑）とある。中山卿に仕え田中家の婿養子として田中増栄と結婚した。このとき田中河内介従六位に叙せられた。

中山忠能の長男忠愛（ただなる）次男忠光（ただみつ）（天誅組総裁）、その妹が慶子（明治天皇の生母）であり、このご兄妹の教育係として田中河内介は中山家に仕えた。したがって忠愛、忠光、慶子三兄妹のご成長を榮しみに心血を注いでご養育にあたった。

このご養育が後の明治天皇（祐宮）に生かされたものである。